



Title	創刊当時を思う
Author(s)	森, 晴秀
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 14-16
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25597">https://doi.org/10.18910/25597</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 創刊当時を思う

森 晴 秀

編集委員から、論文の寄稿ではなく、近況報告を含め、*O. L. R.* 創刊当時の思い出を書けという注文を受けたとき、これは妙なことを考える人達ではないかと思った。なぜなら、*O. L. R.* という純粋な学術雑誌が、この種の雑文を掲載するという主旨を先ず理解するのに手間どったし、大仰な回想の類いを書かねばならぬ程の老境に、筆者はまだ到達してはいないと信じていたからだ。

しかしよく話を聞き、これまでに発刊された号数を考えたとき初めて、あれからもう20年も経ったのかという感慨もあり、半ば感傷めいた妙な気分にもなってきた。これでは若い世代から老耄扱いされても致し方あるまいし、最早逃げかくれもかなわぬと観念した次第である。この辺りでひとつの区切りをつけ、雑誌自身の労をねぎらうことも、あながち無益なことではないかも知れない。

それはさておき、斎藤俊雄、藤井治彦、耕田良一、松平〔柴田〕陽子、それに筆者の5名が修士課程への入学を許されたとき、逆説的には我われが大変恵まれた世代に属していたことに筆者は気づいていなかった。

当時、英文科の専任スタッフは、故加藤猛夫教授と岡村久子助手の2人きりで、確かに吉田安雄、五島忠久、中西信太郎、Hubbell (林秋石) というそうそうたる先生方が講師として参加しておられたが、学生の専攻分野に近い先生が専任としてはおられなかったのも、何かにつけ不便であった。授業そのものよりは、学生同志の議論にすべてをかけざるを得なかったのである。だがすぐ上に藤田実、すぐ下に梅垣清という永遠の青年達(とまあいっておくべきか)がおり、とりわけ藤井治彦といううるさい同輩が、他人を追いつめ切りまくるのに生きがいを感じていたに相違ないこともあ

って、院生としての生活は日増しに緊張の度を加えていった。いつしか我われ学生の力の及ぶうる範囲においても、歴史の浅いこの学科の伝統を築こうという気迫がみなぎり、それがやがては *O. L. R.* 創刊に結びついてゆくのである。

村上至孝教授を迎え、次いで毛利可信教授、山川鴻三助教授（当時）、更には Earl Miner 教授に接するという強烈な刺激の累積の中であって、独想的な論文を書き、それを世に問うという決意のみが、我われの唯一の生きがいとなったのは至極当然のことであった。

*O. L. R.* 創刊号の編集は梅垣清と筆者に課せられたが、先ず誌名を決定するという重要な、しかし最も楽しい仕事には2ヶ月を要した。会員がいくつかつ持ち寄った候補の中から、タカラヅカ・レビューという連想もさることながら、藤井治彦のアイディアが採用され、彼は幸せであった。梅垣清は筆者と共に然るべき印刷会社を求めて巷を彷徨し、目的を果たさぬことにかえて喜びを見出していたかの如くであったが、彼の財政的手腕なくしては創刊はありえなかった。表紙レイアウトの草稿は、本来絵描きのなりそこないである筆者の仕事となった。タイトルのレタリングは筆者の手書きであるが、それを縦に並べて *O. L. R.* と読めるようにした決定稿が、20年間も生存するとは、当初誰も夢想しなかったことである。

*The Criterion* や *Scrutiny* のように、ある強力な編集者が特定の目標を定めて発行する雑誌と異なり、*O. L. R.* のような論文集は、毎年一定数の新入会員がある限り、その気になれば理論的には無限に続くものである。だが卒業生が就職し、新らたな発表機関をもつに従って、会費の徴集が困難となる。その一方、投稿者の年齢が現役を中心とした一定層に集中するにつれて、今度は原稿集めが困難になる。現役層によほどの蓄積がない限り、院生レベルの論集は、資金はあっても運営が極めてむづかしいのが常だ。そういう障害の数々を乗り越えて、ここに記念すべき第20周年日、第20号の発刊を見る。

創刊号は前述のように、教授陣の世代交替と相前後し、飛躍的に講座が

充実しようとする時期に発行された。そしてそれから20年、再び全講座の更新という歴史的局面を迎える筈の時期と、第20号が世に問われる時期とが再び一致したのである。更にこれから20年、今度は現同人が同様の原稿依頼を受けるときが来るであろうことには、最早疑う余地は全くない。

だがそのとき、40年前の老書生が、また書かせて貰える保証も全くない。20年前の、あの燃えさかる情熱と精神の緊張、3日3晩ぐらいは本を読み続け、ノートをとり続けても、なおまた演習の下調べが出来た体力も視力も、この頃はとみに下降線をたどりつつある。

だが、駄文を弄する中にも、筆先に思わず力がこもり、創刊当時の思いが甦る。またもう一つ、二つ、新しい学説も立ててみたくなるのだからこれは不思議だ。老骨に鞭うち、気を取り直させて、明日への新らたな希望も与えてやろうという親心が、本号編集者にあったに相違ない。あとはただ感謝あるのみである。